

私の視点

手相をみる

戸倉新樹 (浜松医科大学皮膚科学講座教授)

古来、手相は占いに利用されてきた。いまでも街角や店の軒先に、小さな机を配して前屈みに座る、曰くありげな風貌の占師をみかける。手掌皺は皮膚科医にとっても重要なものである。1980年に発表されたHanifin & Rajkaのアトピー性皮膚炎の特徴にも手掌皺亢進(図)は記述されている。フィラグリン遺伝子の変異はフィラグリンの産生を低下させ、尋常性魚鱗癬を形成しアトピー性皮膚炎を誘導する。手掌皺亢進はフィラグリン欠乏の証となる。

手掌皺亢進の有無を判断するとき、まずは感情線、頭脳線、生命線が明瞭で深い皺であるか、皆さんもみておられるであろう。「手のひらをみせてください」というと、手を思いっきり広げる患者さんがいる。そうすると皺は伸展され、みにくくなる。その場合は「緩めてください」という必要があり、それによって手掌皺亢進が現れる。つまり、感情線、頭脳線、生命線は手掌皺亢進の判断にとって必ずしもいい線ではない。また皺は併走する二重線のこともある。

手相の説明をネットで探すとたくさんの写真が現れる。大部分は手掌皺亢進の手がモデルに用いられている。これはいささか奇異である。アトピー性皮膚炎患者は手相のモデルとして最適ということになる。手相学的には、手掌の皺が多い人は「神経質でデリケートな人」が多いらしい。ただ、そのぶんすぐく気が利く。これはアトピー性皮膚炎気質にマッチするだろうか。

太い皺よりもっと重要なのは、拇指球の細かく縦横に碁盤や将棋盤の目のように走っている皺である。これがフィラグリン遺伝子を持っている方は明瞭にみえる。細かい皺の集まりは手相学的にはグリル(格子紋)という。拇指球は手相学では金星丘といい、金星丘の明瞭なグリルは、家庭円満を表すとてもよい印であるという。つまり、フィラグリン遺伝子変異を持っておられる方の家庭はうまくいっている、ということになる。

皺の亢進は、ときには足底でもみられる。アトピー性皮膚炎の診察として、足底皺亢進を必ずみている皮膚科医はいないであろう。手掌ほどではないが、同じ末端部分である足底にもフィラグリン欠乏の証はみてとれるのである。その他の皺はどうだろうか。筆者は顔部の皺も目立つ方がおられることに気づいている。しかし、フィラグリン遺伝子変異を持つヒトの全例ではない。手掌皺亢進があってもフィラグリンの遺伝子変異がないヒトもある。もしフィラグリン遺伝子が正常でも、プロフィラグリンのプロセシング酵素が働かなければ、フィラグリンモノマーはつくられない。



図 手掌皺亢進